高見順『激流』論

川上　勉

はじめに

高見順に「現代史と小説」というエセーがある[1)]。自分は、小説のなかでさまざまな資料を使用しているが、それは他人の著作や文章からの「盗用」ではないかという疑念にとらわれながら、しかし、自分が直接体験していない歴史的事実を小説のなかで描こうとすれば、他人の書き残したものに依拠する以外にはないと言っている。また、自分はいままで資料にもとづいて小説を書くということはしなかったが、『激流』や『いやな感じ』では、これまでとは違った書き方をしたとも述べている[2)]。

高見順の最晩年の長編『激流』と『いやな感じ』は、ほぼ同じ時期に並行して書かれている。とりわけ『激流』は、昭和34年１月から38年11月まで、あしかけ５年にわたって雑誌『世界』に連載され、なおかつ未完に終わった小説である。その物語は主として昭和初期の時代を背景としているのであるが、高見は「現代史と小説」のなかで、昭和時代を描こうとしたということを繰り返し述べている。たとえば、

> 私は私の生きてきた昭和時代というものを書きたかったのであり、書きたいのである。私の生きてきた昭和とは一体どういう時代だったのか。それを私自身に即して、いわゆる私小説として書いてもいい。（中略）昭和時代を全体として描く小説、そういう小説もあるだろうが、無性格な記録小説に堕しがちなそういう小説を書く興味は私にはない。しょせん、それぞれの作家が書いた昭和時代しかありえないのだ。そう思いながら、私に即した形でな

く昭和時代といったものを書いてみたい。（強調点――引用者。以下断りがない限り同じ）[3)]

「私に即した形でなく」ということは、具体的には、自分自身が体験した人生とは別の、自分とは異なった人生を通して描くということである。それはこういうことだ。

同じ時代を生きながら、私の人生とは全く違う人生を持った人々の存在というものに、私は強く心をひかれる。私などの思いもよらぬ人生が、私の生きてきた同じ時代に存在している。そして私の生きた人生も昭和時代の人生なら、私の思いもよらぬ人生もまた昭和時代の人生なのだ。

「私の人生とは全く違う人生を持った人々の存在」とは、たとえば『いやな感じ』の主人公で、破天荒なアナーキスト加柴四郎のような人物に典型的に表れているものだろう。そしてまた、『激流』のなかの永森進一と正二の兄弟やその家族、近親者たちや友人たちもそれぞれに「昭和時代の人生」を生きたことになる。

しかしながら、「昭和時代の人生」とは、ただ単に昭和の時代を生きたということだけを意味するものではないはずである。それぞれの人生がどういう意味で「昭和時代の人生」と言えるのかが書かれなければならないし、それがどのような特徴を持って生きられたかが示されなければならない。そのためには、作家は、昭和という時代について歴史家とは違ったかたちで、なんらかのイメージを描き出す必要があるのではないだろうか。その点で、高見順の次のことばはいささか曖昧である。

私は私の知らない人生の、私の生きられなかった人生を小説で

> 生きてみたいと思っている。そうして昭和時代というものを、その結果として書いたという仕事をしてみたい。現代史としての小説などと口はばったいことは言わないが、昭和時代を私たちはどう生きたかを小説として、私なりに書き残しておきたいのである。

「昭和時代を私たちはどう生きたか」を書くことと、「昭和時代というものをその結果として書いた」ということとがうまく結びつくためには、それなりの小説としての方法論を必要とする。本稿のねらいは、このような昭和時代と小説の方法の関係について、主として長編小説『激流』を通して検討することにある。

Ⅰ　父辰吉のこと――長編小説の書き出し

『激流』は、永森進一と正二の兄弟が、昭和という時代の波に揉まれながら、それぞれに自分の信念にもとづいて生きようとする物語である。兄弟がそれぞれ別の生き方を貫こうとする物語は一つのパターンとなっているほど、小説史のなかに無数に存在するもので、ごくありふれた物語形式である。たとえば、マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』は、第一次世界大戦の時代を背景にした、性格のまったく違う兄のアントワーヌと弟のジャックの物語であったが、これは文学史のうえでは「大河小説」と呼ばれ、代々の家族とその時代とが織りなす歴史小説であった。

『激流』の書き出しもまた、大河小説を思わせるようなゆったりとした流れで、主人公の父親の少年時代を描写するところから開始される。

> 進一の父の辰吉は田舎の中学を出るとすぐその春に上京して、遠縁に当る莫大小（メリヤス）問屋の永森商店に身を寄せた。なまじ、中学に

> 行ったため、百姓嫌いになっていた辰吉の、それは自分からの発意で、村役場などに勤めるより、東京に出たほうがはるかにましだった。村から汽車で小半日かかる町の中学校にはいって、五年間をその寄宿舎ですごした辰吉は、親のもとを離れて暮すことには慣れていた[4)]。

なぜ大河小説風かといえば、『激流』には時代の流れを総体的に捉えるだけの構成要素と作者の意図とが窺われるからである。その構成要素としては、主人公の進一と正二の、性格がまったく違う兄弟が配置され、兄の進一は左翼運動を、弟の正二は軍人としての生活を象徴的に表している。また、家族構成が、父辰吉と家付き娘である母妙子、もともと永森商店を起こした祖父と祖母、兄弟の妹、父辰吉の妾の子などで成立している。こうして、進一が政治の世界を、正二が軍隊の世界、父親辰吉が経済の世界、そして女性たちが時代風俗の世界をそれぞれ象徴的に表現するはずのものとして配置されていることになる。

また、作者の意図という点でいえば、「はじめに」ですでに見たように、作者は昭和という時代がどういう時代であったのか、作中人物の人生を通して描こうとしていたのだった。

父の辰吉は、あるとき、引っ越しの際に、「明治天皇の御尊影をみづから外して、それを持って人力車に乗り」こむほどの天皇崇拝者であり、また「日本の興隆をそのまま自分の誇りにして生きることのできた明治人のひとり」である。そして、明治天皇の崩御を知ると、「その御大葬をおがみに行き、赤土の地面に土下座して慟哭」するのだった。

「明治人」というのは、おそらく作者高見順が意識していたと思われる日本人の特徴のひとつであって、のちに、次男正二が参加した「二・二六事件」についてこんな表現がある。

「政党政治があんまり腐敗してるから、こういうことになったんだな」

商家のあるじとして口はばったい政治論をすることは好まない父だったが、天下国家を論ずることの好きな明治人らしい慷慨癖はあって、

「今みたいな世の中では、こういう事件が起きるのも当然だよ」

と蹶起に対して父は肯定的だった。

この明治人辰吉は、基本的に「家」という論理に縛りつけられている。そして、いずれその姿に、長男進一が反撥することになる。

内婿である辰吉は、遠慮がちで目立たない明治人ではあるが、それでも堅実な仕事ぶりで、店を拡張する才覚を持ち合わせているし、秘かに妾をかこち子供までもうけるというしたたかさを見せている。養子という立場のせいで、黙々と仕事だけに打ち込んでいるように見えながら、実は自分の信念を曲げず、また世の中の動きに機敏に反応してみせる様子は、まさに明治人の典型を示しているように思われる。

主人公の進一は、永森商店で生まれた最初の男の子として、祖父母からは溺愛され、母親からも跡取り息子として希望を託されるが、その分だけ養子である父親からはどことなく疎ましい存在として映る。こうした複雑な家族関係が、少年の成長にとってどのような影響を及ぼすかは作者高見順の大きな関心の一つであり、家族構成と主人公の生成の関係は中心的なテーマとなるはずであるが[5)]、この小説では、そのテーマは後退していく。それと同時に、父親辰吉は、小説全体のなかでは存在感が薄くなる。父親の影が薄い小説は、大河小説とはなりえないのである。『激流』は、存在の目立たない、影響力のない父親像にしてしまった結果、三代にわたる家族を中心とした大河小説風な小説スタイルを放棄してしまったことになる。さらに言えば、商家のあるじという人物を設定しな

がら、この人物を通して経済的世界を描くという意図も実現しにくいものとなってしまった。

父辰吉の描写と作品中の役割について言えることは、辰吉の眼に映じたはずの時代がよく見えてこないということである。商売人として、時代の動きに敏感に反応する才覚を持ち合わせながら、時代の大きな流れを読みとり分析する視点が欠けているのであり、そのことが結果的に、息子進一の生き方に対して肯定とも否定ともつかぬ態度を取らせることになったと思われる。

Ⅱ　主人公進一のこと――観念としての社会主義

父辰吉が明治天皇崩御に際して「土下座して慟哭」したのに対し、そのときまだ４歳にすぎなかった主人公の進一は、わずかに「ギーギーときしむ牛車の音だけが、どういうわけか、幼児の耳にそれが不気味にひびいて心に刻みこまれた」記憶として「あざやかに」残っている。進一にとっての明治とはただそれだけであり、そこには父親の残像は稀薄である。

昭和の時代に生きる主人公を描くことに主要なねらいをおいているこの物語では、大正時代はほとんど省略されているが、しかし、大正12年９月の関東大震災は、主人公進一が高校進学のための受験勉強から解放された一瞬であり、精神的休息であったとされている。

> 縁側に上って、戸袋から雨戸をひき出した。震動で家が歪んだのか、その雨戸が敷居からはづせない。進一は雨戸を蹴って無理にはづして、庭へ放り投げた。普段はできない乱暴が進一には愉快だった。自分に強いられた現在の、非人間的とも言いたい生活から、この地震が自分を解放させてくれるかもしれないと、進一

は心を弾ませていた。

「非人間的とも言いたい生活」とはいかにも誇張された表現であるように感じられるが、要するに、一高に進学するために、家族から強制された勉強に没頭せざるをえない受動的な生活のことであり、何よりも進学後に訪れる社会主義の学習という新たな体験との対比で誇張されているのである。

中小企業である永森商店は、大震災後の物資不足を巧妙に乗り切り、商売を拡張し発展させる。社会的、経済的混乱のなかで、あるじである辰吉は、「農民的な」ねばり強さを発揮し、金もうけに奔走する。こういう父親の姿に、主人公は何の関心も示していない。それどころか、

> 進一はローソクの光を頼りに、単語カードをくりながら、ひとり黙々と英語の勉強をしていた。下町ふうの雰囲気にみたされた賑やかさは、正二とちがって進一を孤独にしたようだった。そしてそのことは、進一がそれからの解放を夢みていた受験勉強へと、やはり自分を追いやっていた。

こうして、一高への進学と家族を離れた寮生活とが、進一の精神をいっきょに解放する。高校生活は同級生からはじめて「社会主義」について聞かされる場となる。「今まで受験勉強に没頭していた進一は、社会主義は『危険思想』だという以外には何も知らなかった」のであるが、彼は社会主義を学ぶことによってしだいに「社会」を知ることになる。しかし、その「社会」とは、まるで受験勉強と同じ調子で社会主義の著作を読んだものに過ぎず、学生特有の観念的なものに過ぎない。そのことは次のように書かれている。

危険視されていた社会主義を学んではじめて進一は、社会とは何かを知り得た。まことに、それは目がくらむようなおもいだった。（中略）現実の暗い、許しがたい事実を知ることが、悲しみよりもむしろ喜びをもたらしたと言ったほうがいい。あの地震も進一に与えてくれなかった解放がそこにあった。進一の喜びは解放の喜びであった。

その喜びは進一にとって、人生を知る喜びになっていた。それはほんとうは観念的な喜びなのだが、人生を知らない進一には、そうした喜びのほうが魅力的だった。

社会主義に関する著作を読んで人生を知り得たという喜びに浸ることが、いかに観念的なものであるかは言うまでもない。ところが、それは「解放の喜び」でもあった。この場合の「解放」とは、単に受験勉強からの解放というよりは、家族からの、周囲のさまざまなしがらみからの解放であるだろう。父親の辰吉が営業しているのはメリヤス問屋の中小企業である。主人公が自家の職業に対して嫌悪感なり抵抗感をいだくにしては、それはあまりにもちっぽけな弱小企業に過ぎない。したがって、この場合の解放感というのは、教育制度や家族制度などの旧弊たるしがらみからの解放と受けとるべきものだろう。しかし、「解放の喜び」は心の底からわき出る喜びというよりは、なにか虚飾に満ちたものであるようにみえる。「解放」は社会的な解放ではなくて、個人的レベルの解放であり、両親（とりわけ母親）の期待している進路とは全く逆の道へ踏み出そうとしながら、なおかつその道へ決然と進み出せないような精神の状態を示しているからである。

そして転機が訪れる。理論から実践への転機である。実際運動からはつとめて一線を画していた進一が「よし！」と決意したのは、父親の、浮気がばれて義母と妻の前で意気地なくうなだれている姿を目撃したと

きだった。それはこんなふうに書かれている。

> 理論だけ学んで、実践から身を離していた自分を、これもいくぢのないものと、はっきりこのとき断定を下した。そんな自分も憎まねばならないのだ。ふがいなさは、ひとごとではなかった。（中略）進一の社会主義研究は、社会や人間における不正への怒りを進一のうちに目覚めさせていた。父の不正に対しては当然、母とともに糾弾すべき進一だったのに、逆にここで、母を嘆かせることが明らかなその決意によって、むしろ父の不正に荷担するみたいな奇妙な結果になった。進一が奇妙な根なし草だったせいだろうか。

父親の浮気という「不正な」行為と社会主義の運動に飛び込むという行為とが、母を嘆かせるという点で同じものとして描かれている。まことに「奇妙な」論理である。その原因を「奇妙な根なし草」ということばで説明しようとしていることもまた、理解に苦しむ表現である。根なし草とは生活基盤のないもののことである。精神的、観念的な根なし草は、父親への反撥という気持ちだけで、確固とした理由もなしに運動へと飛び出すことであるだろう。「根なし草」のような進一は、このあと激動の時代を生きてゆくが、それはいつまでも、進一の生につきまとう性質となる。

さて、日本の近代史に汚点を残す「治安維持法」が施行されたのは大正14年３月である。それを受けて、進一の所属する「社会科学研究会」にも解散命令が下る。そして、大学一年のとき、無産青年同盟の活動のせいで逮捕・拘留される。ときはもう昭和に入っている。

進一は書類送検だけで済み、釈放される。釈放されたあと、次にどういう行動をとるべきか、「闘争の道へと直ちにまた自分を進めさせる以外

に、道はない筈だった。彼の思想はそれを彼に命じていた」にもかかわらず、にわかに決心がつかない。そして、「長い旅の疲れが出たみたいに、寝込んでしまう」のだった。

昭和２年５月には、山東出兵があり、そうした日本の情勢について、社会主義研究では先輩にあたる殿木と進一の議論がある。国民の目を外に向けさせて、国内矛盾を見えなくさせるのが山東出兵のねらいであると、ごく平凡な情勢分析が述べられる。また、昭和２年の経済恐慌についても分析が試みられるが、それはこんな具合だ。

> 「パニックは矛盾の先鋭化の現われだが、しかもそのパニックによって、結果としては日本資本主義が強化されてるね。資本の集中と独占化が、結果としてもたらされている。たとえば今度のパニックで、政府の出した救済資金は、ほとんど一流銀行に吸収されてしまったのが現実だ。そうして金融資本が強化されたということは、日本資本主義が同時に強化されたということだな」

学生らしい観念的なことばだ。これからはマルクス主義をさらに研究するという殿木のことばに疑問を感じながらも、進一は実践活動に踏み込むだけの自信を持つことができない。そんな議論のあと、彼らは鎌倉の浜辺に出る。進一が砂のなかに手を差し入れ、砂を掬う場面がある。

> その手を進一は砂のなかに差しこんだ。熱いのは表面だけで、下の砂はひやりとしたつめたさを、秘密めいた感覚とともに進一の手に伝えた。（中略）進一は熱い砂を手ですくった。乾いた砂は痩せた指の間から、たあいなくこぼれて行った。みるみる、砂は逃げて、手のなかにとどめることはできなかった。
>
> なにげないこんなことが、むしろ屈辱のおもいを進一に与えた。

> 湿ったつめたい砂なら、手のなかにとどめることができると、そんな分りきった、はじめから分っているようなことを自分で発見するまで、進一は幾度か砂をすくいつづけていた。

表面の、乾燥して熱い砂は、いくら掬ってみても手の中にとどまることはない。ただ空虚にこぼれ落ちるだけで、あとにはなにも残らない。底のほうの、湿った冷たい砂は、手の中にとどまっている。現実感をともなってそこにある。進一にとって、この現実感を確かめ、噛みしめることが必要なことだったはずだ。社会の表面だけを見るのではなく、その底のほうでうごめいている現実社会の重みと手応えをしっかり感じ取ることが重要なのだと、この象徴的な情景が語っている。観念的世界と現実社会との驚くほどの落差――進一が感じさせられたのはこうした落差にほかならない。

進一の生き方のなかには、個人の解放から社会の解放へと飛躍していく直線的なものが見られる。進一は文字通り、この小説の主人公となり、個人を圧迫する昭和の時代が進一の実践運動との関わりで描き出されている。だが、さまざまな外国の文献を通じての社会主義の学習は、観念的な社会参加という性格を脱することができない。

III　再び進一のこと――不自然な日常

進一は再び組合活動に没入する。しかも、その任務を隠蔽するために、組合活動の仲間の妹と偽装的な結婚生活を送っている。ところで、彼は、どのような理由から、どんな気持ちで再度組合活動に復帰することになったのか。

それまでの体験と、自分を取り巻く状況と、自分自身の将来あるいは家族や友人との関係といったさまざまな思惑や思考が渦巻いていたと想

像されるのに、それほど熟慮のうえの結論というふうには見えない。

> 進一の場合はしかし、弾圧がひどくなってから、むしろ逆に運動に飛びこんだのだ。運動が苦しい状態に追いこまれてから、逆にそのなかにはいって行った。
>
> 肉体も弱く、自分は実際運動には向かない人間だと思って、一時はそれから遠ざかり、調査所にはいっていた彼も、運動の苦境を坐視できなくなったのだ。たとへ非力の自分でも、この自分を運動に捧げることで、すこしでも役に立てばという気持だった。

運動へのこのような参加はヒロイズムとは違う、と作者は説明する。

> 研究会時代の進一の友人で、三・一五や四・一六で捕らえられた者はすでに投獄されていた。進一は中途で足ぶみをして、運動に戻ったのだ。その足ぶみを、今となると進一は、卑怯だったと思う。自分の弱さをそこに見る。改めて階級闘争の一兵卒として自分を鍛え直したいと考えた進一の心はヒロイズムとは遠かった。

ヒロイズムではないが、しかし、「悲壮な自己犠牲の意識」が働いている、と作者は別のところで言っている。「自己犠牲」という表現自体が「インテリの弱さ」にほかならない。作者は、運動への復帰の動機については、当時の左翼運動の状況と主人公の心情から説明しようとしているが、筆を尽くしているようには思われない。しかし、その心境については作者一流の表現で巧みに説明する。たとえば、ある日「オルグ活動」をしていたとき、かつて秘かに愛したことのある女性が夫婦づれで近づいてくるところにばったり出くわす。挨拶を交わして別れたあとの心境が次のように書かれている。

> 脇目もふらずに走っていた眼の前へ、いきなり、思わぬ障害物が現われて、つんのめるように立ちどまった。そんな後味（あとあじ）を与えられて、澄江夫妻と別れた進一は、はじめは普通の歩調だったが、しらずしらずのうちに、急ぎ足になっていた。澄江から早く離れねばならぬという気持か。自分自身へと急いで戻らねばならぬという心の、それは現われだったのか。

この場合の「自分自身」とは、男女の愛情とか夫婦生活を犠牲にして「オルグ活動」に専念することを指している。それゆえ、「悲壮な自己犠牲」とは、昭和の初期に左翼運動に身を投じた者固有の時代意識なのである。

＊

昭和７年に、世に言う「32年テーゼ」が発表される。このテーゼの内容についてかなり詳しく紹介されているところに、この小説の特徴があり、作者の腐心もある。そして、主人公進一の、この方針に対する「疑問」が次のように述べられる。

> 進一は理論的にはその正しさを認めたが、組合活動における実践の面では、そこに大きな困難があると思った。困難であって、疑問ではない。しかし、やり方ひとつでは、疑問にさえなりかねない。（中略）帝国主義戦争反対、天皇制打倒のスローガンを、なまのまま、大衆のなかに持ちこむことが、正しい実践的活動かどうか。（中略）だが、上部機関からは、そうしたスローガンをかかげての闘争を公然と行うことによって、はじめて組合活動における革命的な独自的指導が可能なのだという指令が来ていた。

そして作者は、「激流に似た激烈さはこのときからはじまった」と書いている。「激流」とは、時代状況のいっそうの苛酷さ、それに対抗する闘争方針の先鋭化、上部機関の下部への絶対的指令、大衆レベルでの運動の困難さなど、昭和７年頃からはじまる厳しい反動の時代の全体を表しているのだ。この「激流」のなかで、組合の闘争方針に批判的な意見を述べると、「それは日和見的消極性だ」とか「インテリ出の陥りやすい最小抵抗戦術だ」と、決めつけられる。

こうした活動を続けているうちに、主人公は逮捕され、投獄される。「プロレタリア作家のKを拷問で殺したことからその名が有名になっている本庁の特高刑事」から、苛酷な拷問を受けるが、進一は黙秘をつづける。そして、祖母の死に際していったん帰宅を許されるが、血を吐いて倒れる。ひどい喀血のために瀕死の状態に陥った進一は、書類送検だけで起訴留保と決まる。

サナトリウムでの療養生活は２年にわたり、その間偽装の同棲生活を送っていた早苗が看病にあたっている。そして、退院と同時に二人は正式に結婚するのだが、それはなにかいきがかりといったような、説明しがたい結びつきのように見える。なぜなら、

> 進一と早苗を結ばせたものが、はたして愛かどうか、それはほんとうのところ疑問なのだった。愛から出発した結びつきかどうかは分らない。敗れた者同士、傷ついた心をいたわりあうところに、いつか離れがたい感情が生じたのかもしれない。だとしても、それが愛の出発より、二人を結びつける力において弱いとも言えない。

なんとも歯切れの悪い文章であり、関係である。案の定、二人の間は何かにつけてギクシャクしている。進一と早苗の関係は、最初は世間や

官憲の目をごまかすための偽装的な「同棲生活」からはじまっている。このハウスキーパー的な、不自然で差別的な男女関係を、作者はどのように見ているのか。ひとりの女性を、どのような「大義」であれ便宜的に利用することは、とうてい許されるべきことではない。したがって、この偽装的同棲の責任は男性の側にある。しかしながら、作者は必ずしも早苗を同情的に描いているわけではない。たとえば、二人の結婚のささやかな祝宴の場で、かつての番頭だった源七がひどく酔っぱらう場面で、こんな描写がある。

> 毒づく源七の横顔に早苗はひどく冷静な眼をそそいでいた。正二はこの早苗や進一の仲間の言う客観的な眼とはこういう眼かもしれぬと思った。嫌悪はないが、愛情もない。無関心とも好奇心ともちがう。
>
> 鎖につながれた犬が凶暴な吠え声を立てているみたいな源七の、その顔はみじめな醜さでゆがみ、悲惨と言いたいくらいだった。それをまるで生きものとは別の、感情も生命もない物体でも見るような早苗の眼だった。その早苗自身、小さいが、堅固なブロンズ像のようだった。

「堅固なブロンズ像」のように、「客観的な眼」をした、感情も生命感もない女性のようだというのである。ここにはむしろ、作者自身がこの女性を見つめる冷たい視線があるように感じられる。進一が、ほとんど壊滅状態となった共産党の活動にいったんは参加しようと決意しながら、最後には日本を飛び出して満州に活動の場を見出そうとする原因のひとつに、このような早苗との日常生活が介在しているのは確かなように思われる。

昭和の初期、左翼運動を守るためには、偽装的な同棲生活もやむをえ

ぬ手段と見なされた。しかし、戦後の時点でそのことを取りあげるには、それなりの批判と反省が必要であろう。その視点が、この小説では欠落しており、小説の方法論として不十分さを残している。

Ⅳ　弟正二のこと――事件と証人

正二は、兄の進一とはちがって秀才タイプではなく、勉強も好きなほうではない。それでも将来家業を継ぐことを念頭に入れて、慶応の予科に進学する。昭和５年のことである。正二には正二なりの精神的成長過程があって、それは兄進一とはまったく違ったものである。彼の精神的成長は、年上の女性とのつき合いによるところが大きい。美弥子という演劇部のマドンナや、兄の友人である殿木の恋人だった澄江とのつき合いなどである。

昭和６年、夏休みが終わって大学に戻った９月に、満州事変が勃発する。翌昭和７年５月には五・一五事件が起こり、犬飼首相が青年将校たちによって暗殺される。だが、正二にとってはこうした政治的事件は興味の対象とはならない。「五・一五事件の数日前に、正二と同じ大学の上級生が、大磯の坂田山で恋人と心中した。正二には、五・一五事件よりこのほうがずっと興味のある事件だった」とあるように、正二という人物は、政治よりは恋愛のほうに関心を持っているものとして描かれている。

ところで、進一と正二の兄弟は対照的な人物として描かれてはいるが、兄弟だけで顔をつきあわせて話し合う場面は、小説のなかでは意外に少ない。その数少ない場面は、自宅を離れて下宿している進一に、家からの生活資金を正二が持参してくるところである。弟のおごりで、レストランで食事をしている兄の様子を見ながら、このように観察している。

> これは、どういうんだろう。思想がこんなに強い力を生身の人間に持ちうるとは、正二には考えられないことだった。観念が人間をこのように支配する力を持っていようとは、正二には想像もできないことだった。
>
> ほんとに革命を信じているのだろうか。今の世の中を、自分たちの手で変革できると実際に思っているのだろうか。

正二から見れば、革命運動に身を投じている兄の姿が理解しがたい不思議な存在として映っている。兄弟でありながら、兄の思想や立場が信じがたいほどかけ離れたものに見えるのである。それほど、この兄弟は何もかも対照的に描かれている。この対照的な関係は、革命運動に参加して現状を否定する兄進一の立場と裏腹の関係にあり、したがって、正二は現状肯定の立場になる。あるいは、作者によれば「肯定も否定もない。肯定とか否定とかいうことと土台、正二の心は無縁」だということになる。「若いけど夢のない人」と言われるような存在なのだ。

その彼がいま「錦旗革命」と称される二・二六事件に参加している。「参加する意志がなくて、参加している。現状否定の心など微塵も持ってない正二が現状否定の革命に参加させられている」のである。正二は、事件のただ中にあって、一瞬自分の人生を振り返っている。

> 正二はそうした自分を、いやな奴だというふうには思わない。しかし昔は、いい子だったとは思う。それが変わったのは――兄のせいかもしれないと思う。兄のあの現状否定が自分を、夢のない人間と澄江に言わせたような自分にしたのだと思われる。兄のエリート意識に反撥したのは、たしかだった。非凡ぶるのが、いやだった。正二の嫌悪を特にそそるほど兄が非凡ぶっていたとも思えないが、兄のようなエリート意識のない平凡な人間でありた

いと正二は思ったのだ。

兄進一と対照的な存在は、ここではひたすら「平凡な人間」を強調することで終わっている。これでは、対照的ではあっても対抗的な存在とはなりえない。二・二六事件において、その渦中での目撃者であり体験者ではあっても、その賛同者でも犠牲者でもなく、ましてや実行者・推進者でもありえないのだ。作者は、正二という人物にあまりにも「平凡な人間」を強調しすぎてしまった。そこで、このような人物設定を補完するかのように、『激流』と並行して『いやな感じ』を、昭和35年１月から『文学界』に連載しはじめることになる。その間の事情を『日記』のなかでこんなふうに書いている。

> 『世界』の小説は今まで、実に書き渋って、苦しんだ。もうすこし楽に書けるようにしたいと思って、『文学界』の仕事をはじめたのだ。仕事がふえて、いけないようだが、『文学界』の仕事は、思い切って乱暴に書いてみたいと思ったのだ。抑制で疲れないようにして、強い主人公をのびのびと書いて行こうと思った。そして『世界』を書くときの抑制の苦渋から私を救おうとしたのだ[6]。

「抑制の苦渋」と言われているものが、小説の全体に及んでいて、単に正二という人物だけを指しているのではないことは言うまでもないが、それにしても正二の描き方はあまりにも抑制が利きすぎていて、その生き方に主体性が欠落しているように思われる。自らの時代をいかに主体的に生きるか、主体的な生を生きるものこそ「強い主人公」であり、「昭和時代というものを、その結果として書いたという仕事」が実現されるのではないだろうか。

＊

正二は徴兵検査で甲種合格となり、入営することになる。彼は「兵隊に取られることをさして苦にしていない」のだった。左翼運動に走って病気となり、徴兵検査を免れている兄進一と比べて、「兄貴の分を、きっと俺は勤めさせられるだろう」とうそぶくほど、正二は徴兵を当然の任務と考えている男なのだ。

入営から１年が過ぎた昭和11年２月26日、いわゆる「二・二六事件」が勃発し、正二の所属する中隊はこの事変の中心部隊となる。しかし、その渦中にあって、正二はそれがどのような事態なのか知るよしもない。

> 二・二六事件とのちに呼ばれた反乱がいま正に行われようとしているときなのだった。火山にたとえれば爆発寸前のときだったが、それを正二は渦中に身をおきながら知らなかった。この変な非常呼集は反乱のためのそれなのだということが正二には分らなかった。反乱軍のなかに自分が加えられようとしている事実に正二は気づかなかった。有無を言わせず、加えられるのだが、そうした事実を自分では知らない。なにも知らないで反乱軍に加えられていたのだ。

事件の渦中にあってなにも知らされていない初年兵にとって、その事態がどのような性格のものであるか見当もつかないのはむしろ当然である。しかし、その「事件」の内部で、当の本人たちがどのような動きをしていたのかはつぶさに見ることができた。だが、その内部を、作者は体験することができない。体験しえない事件の内部を、そこに巻き込まれて行動をともにしている作中人物の目で描くところに、高見が「現代史と小説」で触れた「資料」と「盗用」の問題が生じる。

作家は歴史家ではない。あるいは、想像的歴史家である。作家は、自らが体験していない歴史的出来事を描く場合、自分が歴史家でない以上、

歴史専門家の研究した客観的事実を資料として利用する以外に書きすすめることはできない。あるいは、その出来事を直接体験した人々の声を聞くか体験記などの証言を活用するしかない。あとは、それらの「資料」をいかに整合的に構築して、自分なりに納得しうる物語を造りあげることができるか、つまり想像としての歴史を構想しうるかどうかにかかっている。作家の想像力とは、あらゆる「資料」を駆使して、現実＝歴史を再現することである。他人の資料をそのまま利用するのではなくて、さまざまな資料をいかに組み立て再構成するかなのだ。二・二六事件を客観的に外部から記述するのではなく、事件のただ中で生き行動しているひとりの兵士の目を通して描こうとすることである。ここでは、永森正二という、たまたまこの部隊に所属したひとりの初年兵の視線を通して二・二六事件が描かれている。しかし、すでに述べたように、渦中の正二にとって、「二・二六事件」は存在しない。逆に、この事態のただ中で正二にはっきりと見えてくるのは、左翼運動に傾倒している兄進一と自分との違いということである。

> 「兄貴とちがって平凡に生きたいと俺は思った。だが、この俺は勝手な兄貴のちょうど裏返しみたいな人間かな。だから、やっぱり変わってるのかな。俺をこういう人間にしたのは兄貴かもしれない。兄貴とちがった人間になろうと思って、こういう人間になった？だったら、左翼の兄に対して、俺は右翼になるか」

いままで兄に対してたえずコンプレックスを感じつづけてきた弟の正二は、この二・二六事件の体験のなかで自覚的に自らの生を確認しているとも言える。事件を指揮した中隊長とともに死ぬことを覚悟することによって、正二は「二・二六事件」を理解し、それを生きている。「正二は大尉の純粋な憂国精神を一瞬にして理解した。大尉の憂国の志はその

まま正二のものになっていた」からである。

中隊長の自決の場面で、この物語の主人公である兄進一のイメージが比較されるのは、まさに作家の想像的歴史家としての仕事である。自ら拳銃の引き金を引いて倒れた中隊長の身体から血が流れている。その光景は次のように描かれる。

> 血が雪にしみて、ひろがって行く。かき氷のイチゴを思わせる美しい色だった。正二は兄の進一が喀血したときに見た血の色を思い出した。
>
> （こんなときまで、兄貴がつきまとってくる・・・・・）
>
> 正二はそれがいまいましく、兄貴のあんな血などより、大尉のこの血の色のほうが、ずっとずっと美しく、純粋だと唇を噛んだ。

やがて間をおかずに、正二の部隊は満州へと派遣される。そして、進一もまた、その後を追うようにして満州へ出かけることになる。

弟正二の存在は、高見順の作品としては珍しいパターンである。二・二六事件を内部から描くためには、正二という作中人物を必要とした。だが、兄進一との対抗関係を強調するためには、正二はあまりにも「平凡な人間」として設定されすぎたし、兄弟の関係はあまりにも家族的すぎた。もっと激しい人間が必要とされたと思われる。

Ⅴ　満州へ

進一のほうは、雑誌社の友人のすすめで、評論の執筆に取り組んでいる。彼が書こうとしているのは、大げさにいえばインテリの生き方についてであるが、別の言い方をすれば精神的デカダンスの問題である。しかし、具体的にどのような評論が書かれたかは小説のなかでは示されて

いない。ただ書こうとしている内容だけが、現在の精神的情況として描かれているだけだ。当時の精神的情況とはなにか。

> 良心の挫折はかつての急進的なインテリをデカダンに陥らせていた。そしてそれは一般に現代のインテリの精神的傾向になっていた。すべてを悪しき状況のせいにする、主体性の喪失である。歴史の進行は、それが必然的なものなら、人まかせにしておいてもいいという類いのデカダンからはじまって、さまざまなデカダンが生じていた。

つまり、昭和10年代におけるインテリの生き方とは、「こうしたデカダンから立ち直り、精神の健康を取り戻すにはどうしたらいいか」という問題だった。この時代の「悪しき状況」とは、単にマルクス主義や左翼的思想だけではなく、自由な思想や言論までが弾圧の対象となっていることである。そうしたなかで、デカダンに陥らずに、主体的に生きる道を探すことは極めて困難な課題である。主人公の進一はひたすら「生活に即かねばならない」と考えている。しかし「生活に即く」ということもまた観念的な願望なのだ。ただここで強調しておくべきことは、高見順の他の作品とはちがって、進一は単純に「転向者」とは言えないということである。病気や家庭の不幸などの事情で運動から離脱することはあっても、転向を誓約して獄中から釈放されたという経験を持ってはいない。『激流』を、高見順の他の作品に見られるような転向の物語として読むことはできないように思われる。なぜなら、進一は「党再建のために働くことを今は決意していた。熟慮の末の決意だった。重野［かつての組合活動の仲間――引用者注］から連絡があったら自分の決意を告げようと待っていた」からである。

しかし、その重野からの連絡がないまま、あるとき、いまは満州国政

府の産業部で働いているという、かつての友人有光と出会う。有光は、以前とは違って、「大地に根をおろした人間の逞しさ」を感じさせる。こうして、主人公進一に新しい視界が開ける。

> 広漠たる満州の原野が進一の眼前に展開した。それは進一に、
> （君も、どうだ・・・・・）
> と呼びかけてくる。知らない人生、新しい生活が進一を力強く招いた。

どうやら、主人公をこの時代の日本のなかに閉じこめておくことは、左翼運動がほとんど壊滅状態にある状況では、どうにも動きがとれないことになる。拷問が待ちうけているか、あるいは一歩退いて様子を見るかのどちらかになってしまいかねない。そこで作者が主人公のために選んだ道は、日本を脱出し満州へと場所を移すことであったのだ。軍部が跋扈する満州という土地での左翼的運動ははたしてどこまで可能か。それは一種の賭のようなものであろう。

長編小説『激流』の第一部は、雑誌『世界』の昭和34年１月号から38年２月号まで25回にわたって連載された。引き続き第二部では、進一の満州での生活が描かれるのだが、本稿はひとまずここで筆を擱くことにする。

注

１）昭和38年６月20、21、22日付『東京新聞』紙上に掲載。のちに『高見順全集』第13巻勁草書房に収録。引用はこの『全集』による。昭和38年６月といえば、『いやな感じ』の連載が５月に終わったばかりであり、また、『激流』の連載も11月に終わろうとしている時期である。

２）『いやな感じ』は、『激流』の連載開始から１年後の昭和35年１月号の雑誌『文学界』に連載されはじめ、昭和38年５月に完結した。

3）『高見順全集』第13巻。引用に際しては、旧仮名遣いを現代仮名遣いに、また、旧漢字を当用漢字に改めた。また、強調点は断りがない限り引用者による。
4）『高見順全集』第７巻。引用の際、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。
5）たとえば『わが胸の底のここには』（昭和25年）では、母、祖母、主人公の三人家族が描かれる。この作品で扱われているのは、大正12年までの主人公の成長過程である。
6）『続高見順日記』第１巻勁草書房。昭和35年２月15日の項。